

肥前古窯の変遷

一 烧成室規模よりみた一

大橋 康二

はじめに

肥前陶磁の製品の変遷は、近年の調査研究によつて基本的な流れは明らかになりつつある。しかし、これらを焼造した窯や窯跡に捨てられた窯詰用の道具については十分な研究がなされたとは言い難い。本稿では近年の考古学的研究の成果を踏まえて窯本体の変遷について概観してみたい。

なお焼成室の大きさの記述の場合、特にことわりのない場合には、幅というのは、中央付近の床面で測つたものをいい、また奥行といふのは、火床の部分を含めて、前壁から奥壁の部分までの床の長さをいうことにする。

一、窯体の比較

肥前の窯のうち、発掘調査によつて明らかになつた窯は山の斜面を利用した階段状連房式登窯である。

この形態と異なる窯としては長崎県諫早市の土師野尾古窯跡群の中道古窯跡注1がある。この窯は登窯の下半が破壊消滅しており、上部の焼成室五室を検出した。保存状態の良かつた四室をみると、窯床面の勾配が比較的急であり、焼成室間の奥壁の高さは二二一・二九センチと低い。また焼成室の幅は一・二二一・一・三三三メートル、奥行が二・三五・二・七一メートルと奥行が極端に長いのが特徴である。

焼成室が幅より奥行の長い平面縦長プランの窯は、肥前の場合、唐津系陶器を焼造した窯にいくらくか例がある（第一図）。例えば、焼山下A窯（伊万里市）、山辺田四号窯（第二図）、天神森四号窯（以上有田町）、葭の本三号窯（佐世保市）などがある。このうち磁器を併焼したのは天神森四号窯である。

肥前の磁器窯の焼成室は幅より奥行の短い平面横長プランを呈するものが一般的である。この点については既に秀島貞康氏が土師野尾古窯跡群と他窯の比較で焼成室の奥行と幅に注目して、「陶器窯から

磁器窯への移行に伴い、縦長プランから正方形プランを経て横長プランの窯室へと変遷していく^{注2}とし、また「同時に規模の拡大化、火床の増大」を指摘する。筆者も既に窯の焼成室の幅が時代とともに拡大傾向を示すことを述べてき^{注3}たが、これも一、具体的に数字をあげて考察したことはないので、ここでそれを行い、改めて製品・窯道具などを考慮して時代変遷を追つてみたい。

一、焼成室平均幅の変遷

焼成室平均幅の変遷をみると、窯の拡大が、長い登窯の全体にわたって一様に進んだではなく、連房式登窯のうち上方に登るに従つてその拡大傾向が強いことが注意される。そのため焼成室数の少ない窯、つまり十室以内のように小規模生産の窯においては

るほど窯の上方と下方の焼成室幅に差が開く傾向があることや、窯の焼成室数が有田辺では一七世紀前半では一〇数室が普通であり、室数が一〇室以下の地方窯と単純に比較が難しいことがあげられる。つまり同時期の窯の焼成室幅を単純に平均計算すると、焼成室数の少ない窯の場合は、登窯の下部の幅の狭い部分の割合が大きいため、平均値は小さくなり、逆に室数の多い窯では、上部の幅の広い部分が大きな割合を占めるために平均値は大きくなる。この平均値の大小が意味するものは生産規模の差なのである。それならば連房式登窯のうちの同じ位置の焼成室間で比較すればよいのであるが、十八世紀以降の窯全体を調査した例は少ないので、そうした比較は現在のところ困難なのである。よつて焼成室幅を比較するに当つて、次のような操作を加えることにした。

- (一) 胴木間およびそれに続く焼成室三室分は除く。これらの位置を呈するものが現れるのである。松浦皿山窯^{注4}（長崎県松浦市）はその早い時期のものと思われ、全体を発掘した好例であるが、副島邦弘氏がこれに注目し、須恵窯（福岡県粕屋郡須恵町）、平原窯（宮崎県延岡市）などをあげ、磁器窯の中でこうした傾向が現れることを述べている。^{注5}

- (二) 焼成室の幅・奥行のどちらか一方のみが判明した室の場合も、その判明した一方の数値は採用する。

以上のような操作を加えて各窯の焼成室幅・奥行の平均値を算出し、それを図化したのが第一図である。これらを製品・窯道具・窯壁構築材などの点から検討すると六つに大別できる。以下順次説明しよう。

しかしこれは必ずしも磁器窯に限らず、肥前系の窯の築窯技術の変遷の可能性が強いのである。このように焼成室幅は年代が下降す

(1) 第一グループ

焼成室平均幅が一メートル台であり、中道窯、焼山下A窯がある。

今後、唐津系陶器窯の調査が進めば、このグループの窯も増えることが予想されるが、現在は少ない。前述のように奥行が幅より長いという点も特徴としてあげられよう。占地の仕方は山の斜面に直角に築き、中道窯をみると勾配は急である。中道窯では焼成室床面も奥壁側から火床へとかなりの傾斜で下つており、奥壁の高さは低い。製品の窯詰技法は、皿の場合主として胎土目積が用いられ、皿の装飾は焼山下A窯の場合、鉄絵が施されている。

窯道具は中道窯のように工字形のトチン（第六図2）と円板状に手捏ね成形したハマが用いられている。^{注6}

このグループの年代は、製品の窯詰めが胎土目積であり、装飾が鉄絵であること、皿の形態などから、唐津焼創始から一六〇〇年代（一六〇〇年から一六〇九年を表す。以下同じ）と推測される。

(2) 第二グループ

焼成室平均幅が二～二・八九メートルの窯であり、葭の本一～三号窯（佐世保市）、茅ノ谷一号窯（伊万里市）、原明A・B窯（第二図）、迎の原上窯（以上西有田町）、山辺田四（第二図）、七（第三図）、九号窯、天神森三、四、七（第三図）号窯、清六の辻二号窯

（第二図）、猿川B窯（第三図）（以上有田町）、畠ノ原窯（長崎県波佐見町、第三図）など調査例は多い。

このグループの段階では、山辺田四号窯、天神森四号窯、葭の本三号窯のように奥行の方が長い縦長プランの焼成室がみられるが、このグループの中で奥行より幅の拡張が著しく、横長プランの焼成室が多くなる。

占地は山の斜面に直角に設けたものが多いが、原明A・B窯や天神森七号窯のように少し斜行したものも現れる。また焼成室床面の傾斜は緩くなり、水平に近くなる。勾配は天神森七号窯、原明B窯、清六の辻二号窯などのように上部を緩く作る例がみられる。これは登窯の火度の調整のためであろうと思われ、中国などでもこうした例があり、現代竈窯では後部の傾斜度を小さくして熱が速く流失するのを防ぐためとしている。^{注7}

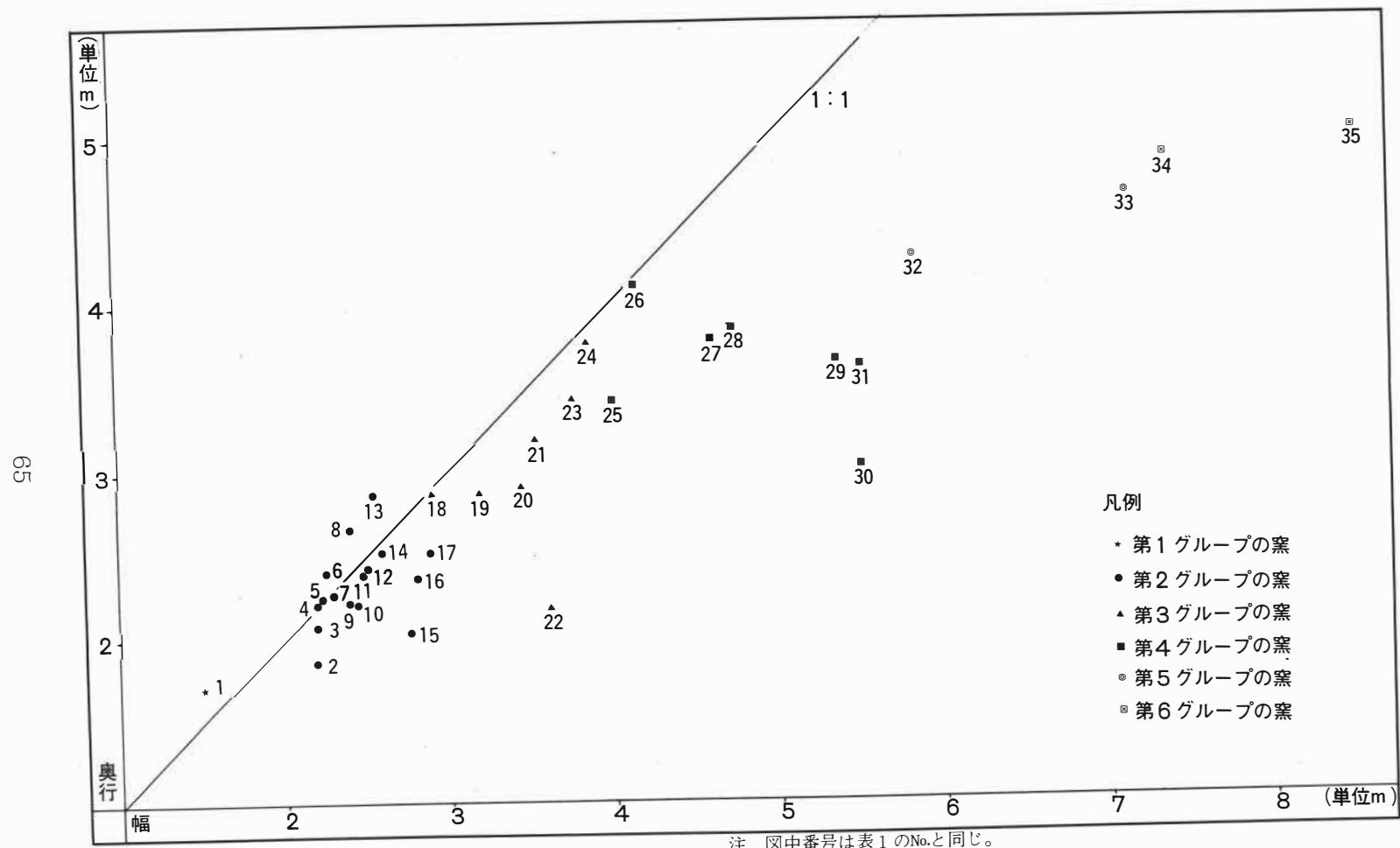
このグループの窯には唐津系陶器窯もあるが、陶器と磁器併焼の窯が多い。また猿川B窯のように磁器専焼の窯がある。唐津系陶器のみを焼いたとみられる窯としては葭の本一～三号窯、茅ノ谷一号窯があり、山辺田四号窯もその可能性があると思われる。このうち葭の本一号窯は胎土目積の皿が主で、鉄絵装飾を施しており、二号窯は物原から胎土目積や鉄絵を施した製品が出土しているが、窯床面出土品は砂目積の溝縁皿であり、三号窯はまつたく砂目積溝縁皿

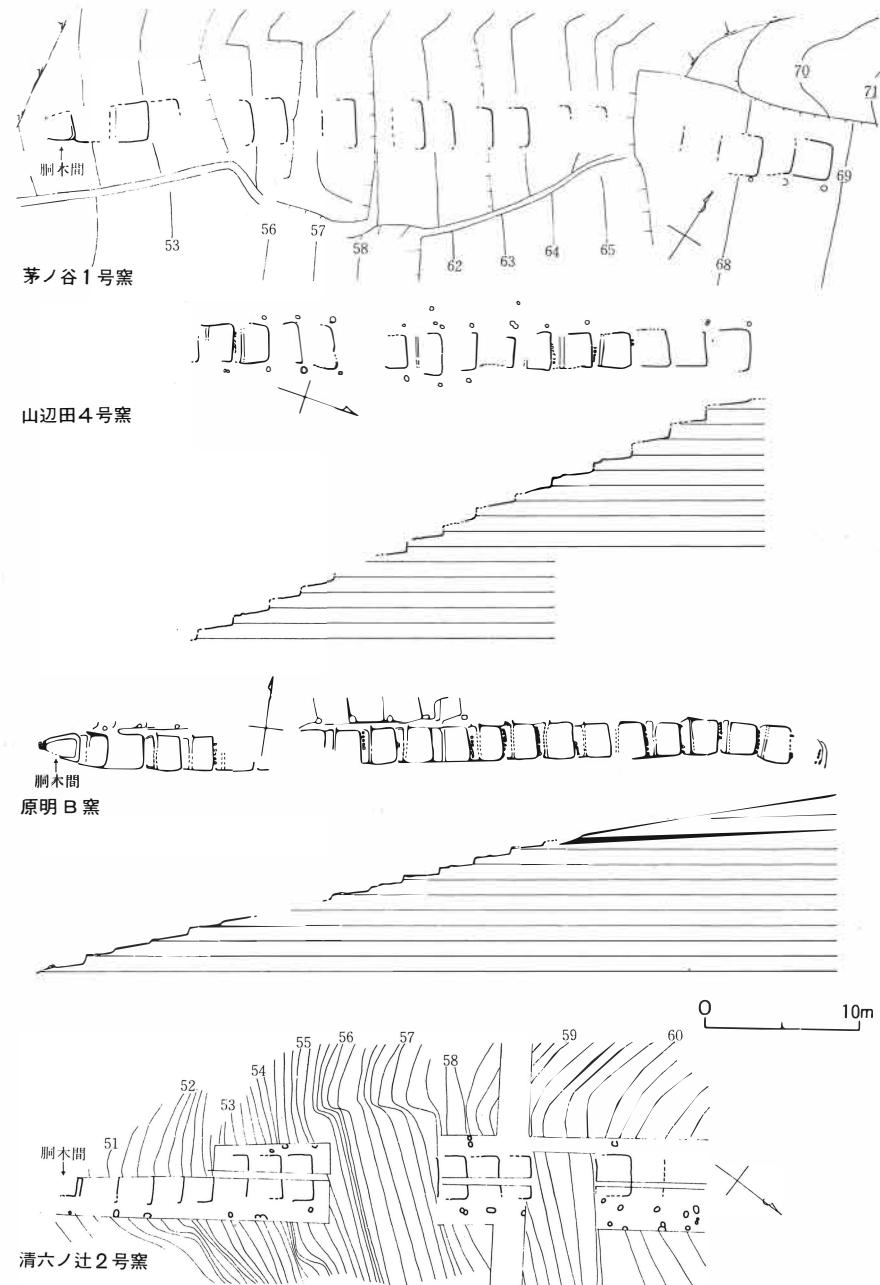
グループ名	No.	窯 名	所 在 地	焼成室 平均規模		文 献
				幅	奥行	
第一グループ	1	焼山下A窯	伊万里市大川町大字川原字辻	1.5	1.7	伊万里市教育委員会「古窯跡分布調査報告」1984
	2	迎の原上窯	西有田町大字曲川(甲)字中川内	2.19	1.84	西有田町教育委員会「迎の原古窯跡」1977
	3	天神森7号窯	有田町大字西部字天神元	2.19	2.07	有田町教育委員会「佐賀県有田町天神森古窯址群調査概報」1975
	4	葭の本1号窯	佐世保市	2.2	2.2	佐世保市教育委員会「葭の本窯跡範囲確認調査報告書」1983
	5	葭の本2号窯	佐世保市	2.21	2.22	同 上
	6	山辺田4号窯	有田町大字中部字後山	2.24	2.39	有田町教育委員会「佐賀県有田町山辺田古窯址群の調査(遺構篇)」1980
	7	原明B窯	西有田町大字曲川(甲)字ズウメキ	2.28	2.26	西有田町教育委員会「原明古窯跡」1981
	8	天神森4号窯	有田町大字西部字天神元	2.4	2.65	有田町教育委員会「佐賀県有田町天神森古窯址群調査概報」1975
	9	畠ノ原窯	波佐見町	2.4	2.2	佐々木達夫「波佐見・畠の原窯跡の発掘調査」白水No.9・1982
	10	猿川B窯	有田町字岩中	2.43	2.2	佐賀県教育委員会「有田町猿川古窯跡第一部発掘調査概報」1970
	11	山辺田7号窯	有田町大字中部字後山	2.48	2.38	有田町教育委員会「佐賀県有田町山辺田古窯址群の調査(遺構篇)」1980
	12	山辺田9号窯	有田町大字中部字後山	2.5	2.4	同 上
	13	葭の本3号窯	佐世保市	2.54	2.85	佐世保市教育委員会「葭の本窯跡範囲確認調査報告書」1983
	14	原明A窯	西有田町大字曲川(甲)字ズウメキ	2.59	2.51	西有田町教育委員会「原明古窯跡」1981
	15	清六の辻2号窯	有田町大字西部字西黒川	2.76	2.02	
	16	茅ノ谷1号窯	伊万里市松浦町大字山形字辻	2.8	2.35	伊万里市教育委員会「古窯跡分布調査報告」1984
	17	天神森3号窯	有田町大字西部字天神元	2.88	2.5	有田町教育委員会「佐賀県有田町天神森古窯址群調査概報」1975
第二グループ	18	山辺田2号窯	有田町大字中部字後山	2.9	2.85	有田町教育委員会「佐賀県有田町山辺田古窯跡群の調査(遺構篇)」1980
	19	山辺田1号窯	有田町大字中部字後山	3.18	2.85	同 上
	20	天狗谷E窯	有田町字白川	3.44	2.88	有田町教育委員会「有田天狗谷古窯」1972
	21	天狗谷A窯	有田町字白川	3.53	3.17	有田町教育委員会「有田天狗谷古窯」1972
	22	百間窯	山内町大字宮野字板ノ川内	3.6	2.16	九州陶磁文化館「百間窯・薩口窯」1985
	23	掛の谷窯	有田町大字中部字掛谷	3.76	3.41	佐賀県文化館「弥源次古窯址物原ならびに掛の谷古窯址について」1970
	24	天狗谷D窯	有田町字白川	3.85	3.75	有田町教育委員会「有田天狗谷古窯」1972
第三グループ	25	天狗谷B窯	有田町字白川	4.0	3.41	同 上
	26	不動山皿屋谷3号窯	嬉野町	4.73	3.82	嬉野町教育委員会「不動山窯跡」1979
	27	地蔵平東A窯	佐世保市	4.14	4.1	佐世保市教育委員会「三川内古窯跡群緊急確認調査報告—木原地蔵平窯跡の発掘調査」1978
	28	清源下窯	伊万里市大川内町(丙)字三本柳	4.6	3.75	伊万里市教育委員会「古窯跡分布調査報告書」1984
	29	柿右衛門B窯	有田町大字西部字梨木原	5.36	3.62	有田町教育委員会「柿右衛門窯跡第2次発掘調査概報」1978
	30	御経石窯	伊万里市大川内町(丙)字三本柳	5.5	3.0	伊万里市教育委員会「古窯跡分布調査報告書」1984
	31	江永C窯	佐世保市	5.5	3.6	佐世保市教育委員会「江永古窯」1975
第四グループ	32	柿右衛門A窯	有田町大字西部梨木原	5.83	4.25	有田町教育委員会「柿右衛門窯跡第3次発掘調査概報」1979
	33	江永A窯	佐世保市	7.12	4.6	佐世保市教育委員会「江永古窯」1975
第五グループ	34	谷窯	有田町字大絵本	7.35	4.82	
	35	小樽2号新窯	有田町字保屋谷	8.5	4.96	有田町教育委員会「小樽2号窯跡」1986

注 ● 単位:m

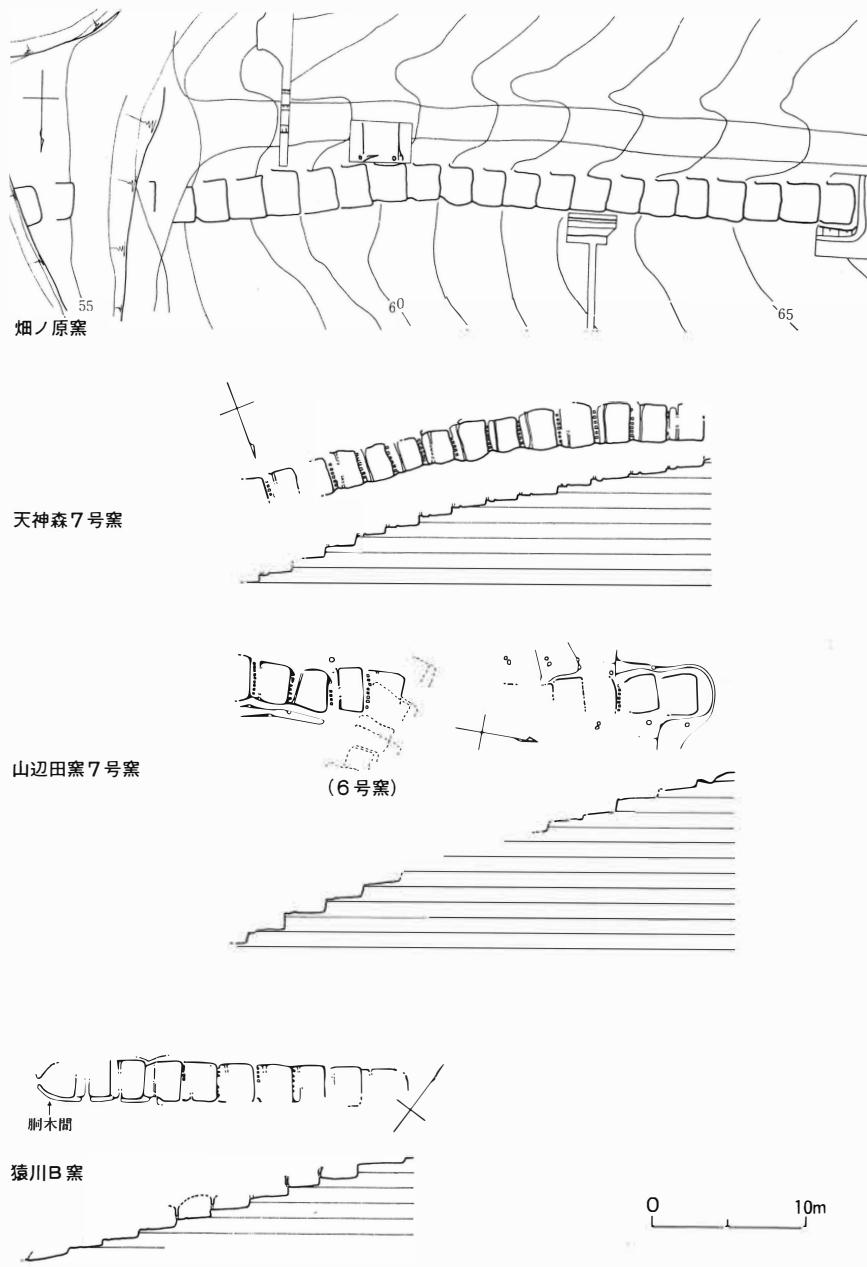
● 清源下窯の幅は奥壁部分で測ったもの

表1 肥前古窯における焼成室規模(平均)の一覧

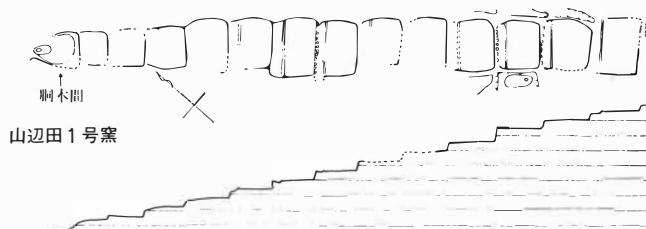




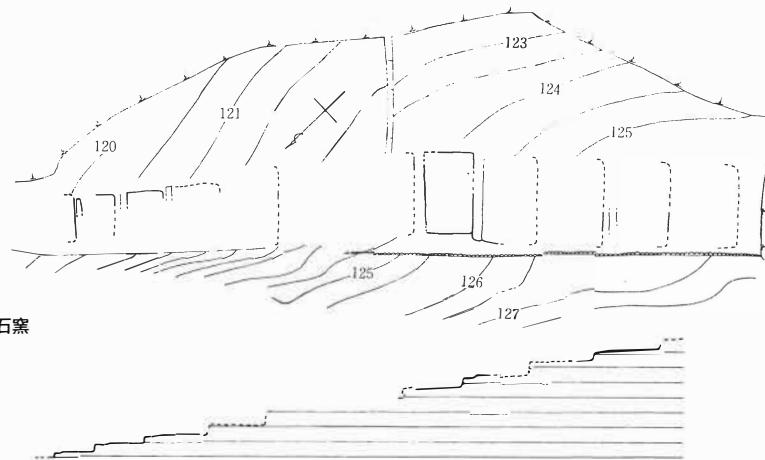
第2図 第2グループの窯跡



第3図 第2グループの窯跡



山辺田1号窯



御経石窯

不動山皿屋谷3号窯

0 10m

第4図 第3・第4グループの窯跡

が中心となる。山辺田四号窯は物原下層出土品は胎土目積で鉄絵が多いが、上層になると砂目積のものが少量みられ、上屋の柱穴と思われるピットからは胎土目積と共に砂目積の皿が得られている。

このように唐津系陶器窯における窯詰めは胎土目積から砂目積へとだんだん移行してゆき、一時期併存したことが、葭の本窯や山辺田四号窯、あるいは阿房谷下窯注8（伊万里市）から知られる。

陶器と磁器を併焼した窯は、天神森三、四、七号窯、原明A・B窯、畠ノ原窯、山辺田七号窯、清六ノ辻二号窯など多い。陶器の主たる製品は砂目積の溝縁皿であり、言い換えれば、砂目積の溝縁皿と磁器を併焼した窯はこのグループに属すると推測されるのである。迎の原上窯も廃窯時、窯床面に残された製品はすべて磁器と報告されているが、窯周辺から砂目積の溝縁皿が出土しているから両者の併焼期があつた可能性が強い。原明窯の場合、窯床面から砂目積の溝縁皿と砂目積の染付磁器皿が多数出土しており、また砂目を挿んで重ね積みした溝縁皿が数枚熔着し、その一番上に磁器碗が熔着したもののが二例ある。これによつても唐津系陶器と磁器が同じ焼成室内で焼成可能であり、また実際に焼成されたことが知られる。

窯内や窯周辺を含め、砂目積の唐津系陶器が出土していない磁器窯で焼成室平均幅が二～二・八九メートルの例は、現在のところ猿川B窯のみである。今後有田内山地域の窯の調査が進めばこの時期

の事例が増える可能性は強い。

このグループの窯の窯道具をみると、主体は第一グループと同様、トチンとハマであるが、いくらかサヤの出土例がみられる。サヤは第六図11、13、16のような右回転ロクロ成形によるもので、底部には回転糸切痕を残す。蓋（第六図10、12、15）も同様のロクロ成形による。

このグループの上限年代は、唐津系陶器における胎土目積から砂目積に移行する時期に当るとみられ、砂目積や磁器など新しい技術は秀吉の朝鮮出兵によつて連帰られた朝鮮人陶工たちがもたらしたものと推測されることから、慶長三年（一五九八）とみている。そして下限年代は唐津系砂目積溝縁皿が消え、磁器を中心の生産に移行するのを、寛永十四年（一六三七）の窯場の整理・統合事件によると推測しているため、一六三〇年代末と考えられる。

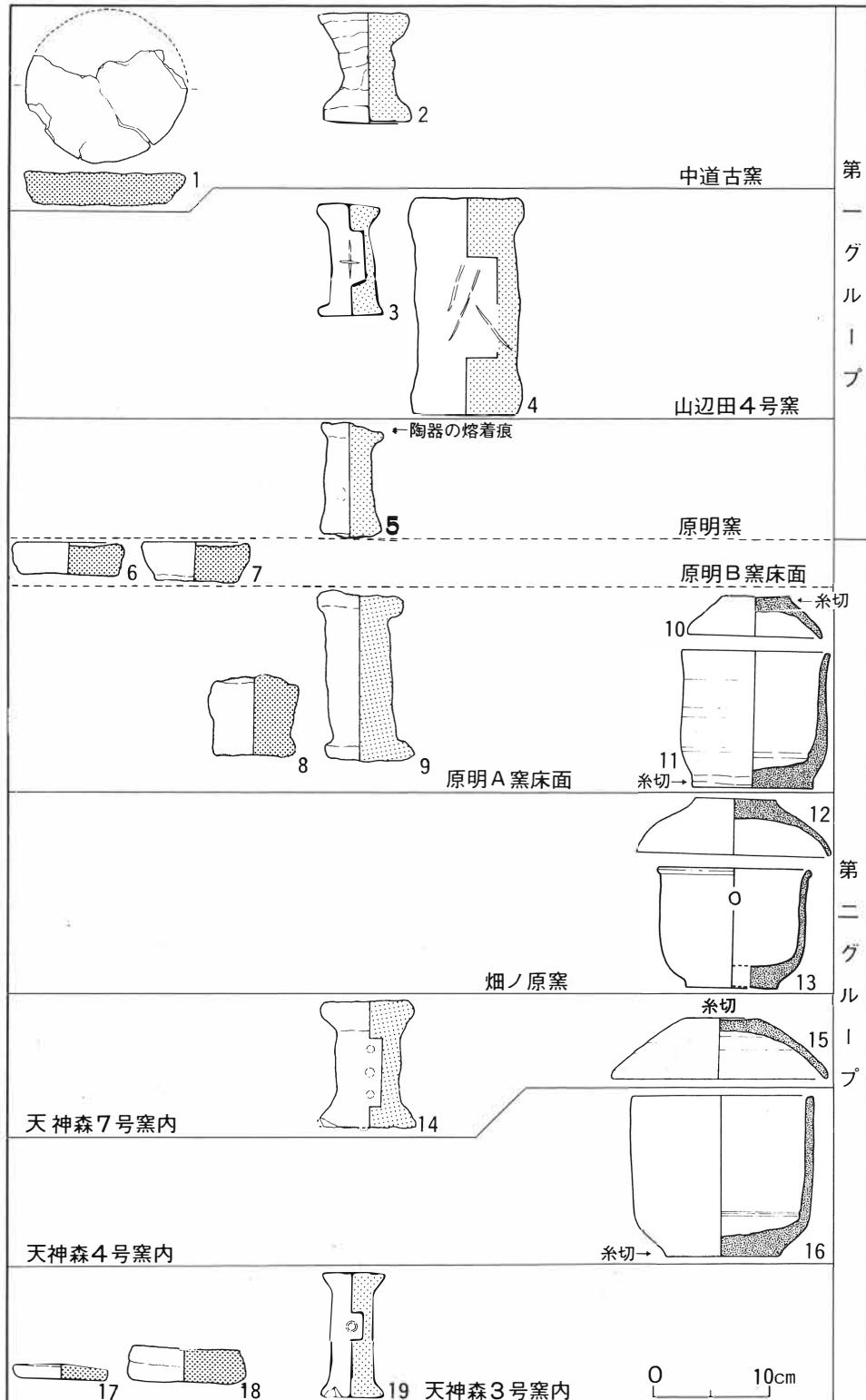
(ハ) 第三グループ

焼成室平均幅が三メートル台程度であり、山辺田一（第四図）、二号窯、天狗谷E、A、D窯、掛の谷窯（以上有田町）、百間窯（山内町）などがあり、窯ノ辻窯（山内町）も上部一室の推定幅三・三メートルでこのグループに属するとみてよい。

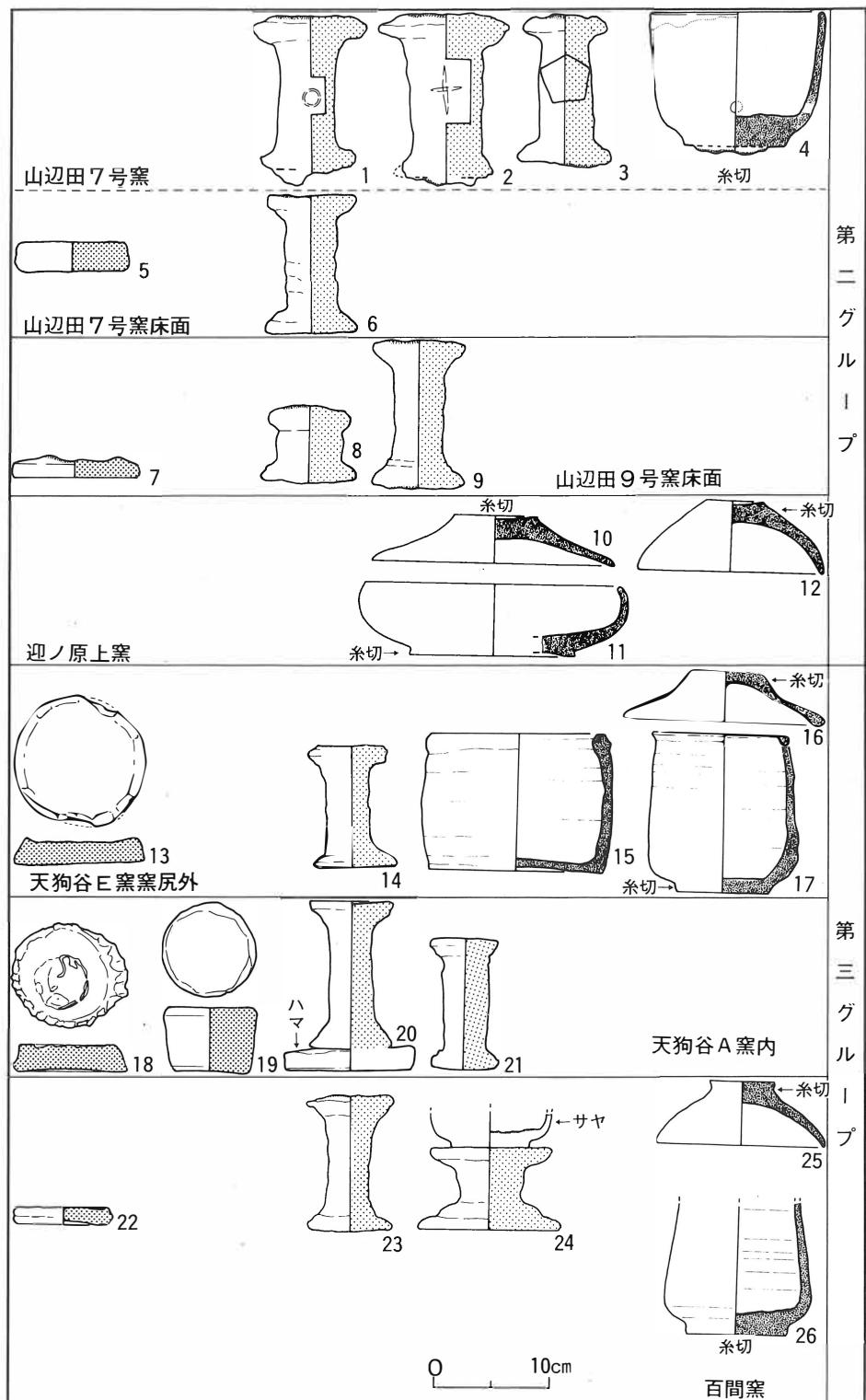
このグループの焼成室は平均してみると横長プランとなり、占地



第5図 第4～第6グループの窯跡



第6図 第1・第2グループの窯跡出土の窯道具



第7図 第2・第3グループの窯跡出土の窯道具

は山の斜面に對して斜行するものが多くなり、勾配は比較的緩くなる傾向がある。

このグループのうち、砂目積の唐津系陶器皿が出土したのは百間窯だけであるが、百間窯の場合、複数基の窯があるとみられ、廢窯時の窯床面に残された出土品には砂目積の皿はみられず、主体である磁器はその形態・意匠などから一六五〇年代の初め以前と推測した。¹⁰ このグループの窯に共通の製品としては、高台部分無釉の碗があげられる。この碗は青磁釉を外面に掛け内面を透明釉もしくは染付としたもの、青磁釉の替りに天目（鉄）釉を施したもの、染付の三つに大別できる。高台の削りは断面台形で高台内中央に兜巾を残すような粗放なものが多く、無釉であることと共に、碗の生産量の増大とコストを下げる方法として一時期採用されたものと推測される。それが寛永末から正保にかけての八年間に、課税額を約三五倍に増額されたことと関係があるであろうことは既に考えたことがある。¹¹

また、皿の口径に占める高台径の割合が大きいものが現れ始め、高台内に「大明」、「大明成化年製」、「大明成」や方形枠内に「福」字や変形字を染付したものが多くなる。口端に鉄鋸を塗るいわゆる口紅装飾もこのころから現れ、比較的高級品中心に用いられる。窯道具は第二グループのトチン、ハマ、サヤの組合せが引続き用

いられ、百間窯や窯ノ辻窯のような高級品を比較的多く焼造した窯ではサヤ（第八図11～13、16～18）の出土量が多い。サヤに所有者銘を施す場合、へら書によるものが多く、次に押印銘である。また

このグループのうちから輪積成形による桶胴形のサヤ（第七図15）が現れる。窯体を未調査のダンバギリ窯（山内町）は物原の堆積が薄く、製品の種類が少ないため、操業期間が短い窯と推測されたが、

この窯ではロクロ成形による糸切底のサヤ（第八図31～33）と輪積成形による桶胴形のサヤ（第九図3～5）が出土し、後者の方が量的に多い。そして平面変形の皿を糸切細工によつて成形し、高台も変形に貼付けたもののがかなり出土している。そのためハマにも平面椿円形などの変形のハマ（第九図1）が加わる。この種の椿円形ハマは百間窯においても一点出土しているが、百間窯出土の製品には貼付高台はみられなかつた。しかし製品を比較すると、百間窯の廃窯年代とダンバギリ窯の築窯年代は同じころの可能性があり、百間窯の廃窯ごろに糸切細工技法を行い始めた可能性がある。しかし第三グループではこの技法はまだ一般的ではなかつたと思われ、このグループの窯で貼付高台の変形皿が出土した例はない。

山辺田窯のうち一、二号窯や六号窯が山辺田窯址群の廃窯年代に近い窯とみられるが、これらの周辺からロクロ成形による断面逆台形のハマが出土していること、一六六〇年銘の例（長吉谷窯出土）¹²

をもつ染付雲龍荒磯文碗・鉢類が少量出土していること、荒磯文碗と共に出土する例の多い日字鳳凰文皿が少量ある。日字鳳凰文皿は掛の谷窯においても出土しており、これらが第三グループの下限を示すものとみられ、年代は一六六〇年代と推測している。

(二) 第四グループ

焼成室平均幅は四～五・八メートル程度であり、天狗谷B窯、柿右衛門B窯（以上有田町、第五図）、地蔵平東A窯、江永C窯（以上佐世保市）、不動山皿屋谷三号窯（嬉野町、第四図）、清源下窯、御経石窯（以上伊万里市、第四図）などがある。

このグループになると焼成室の平面形は一層横長傾向が強まる。

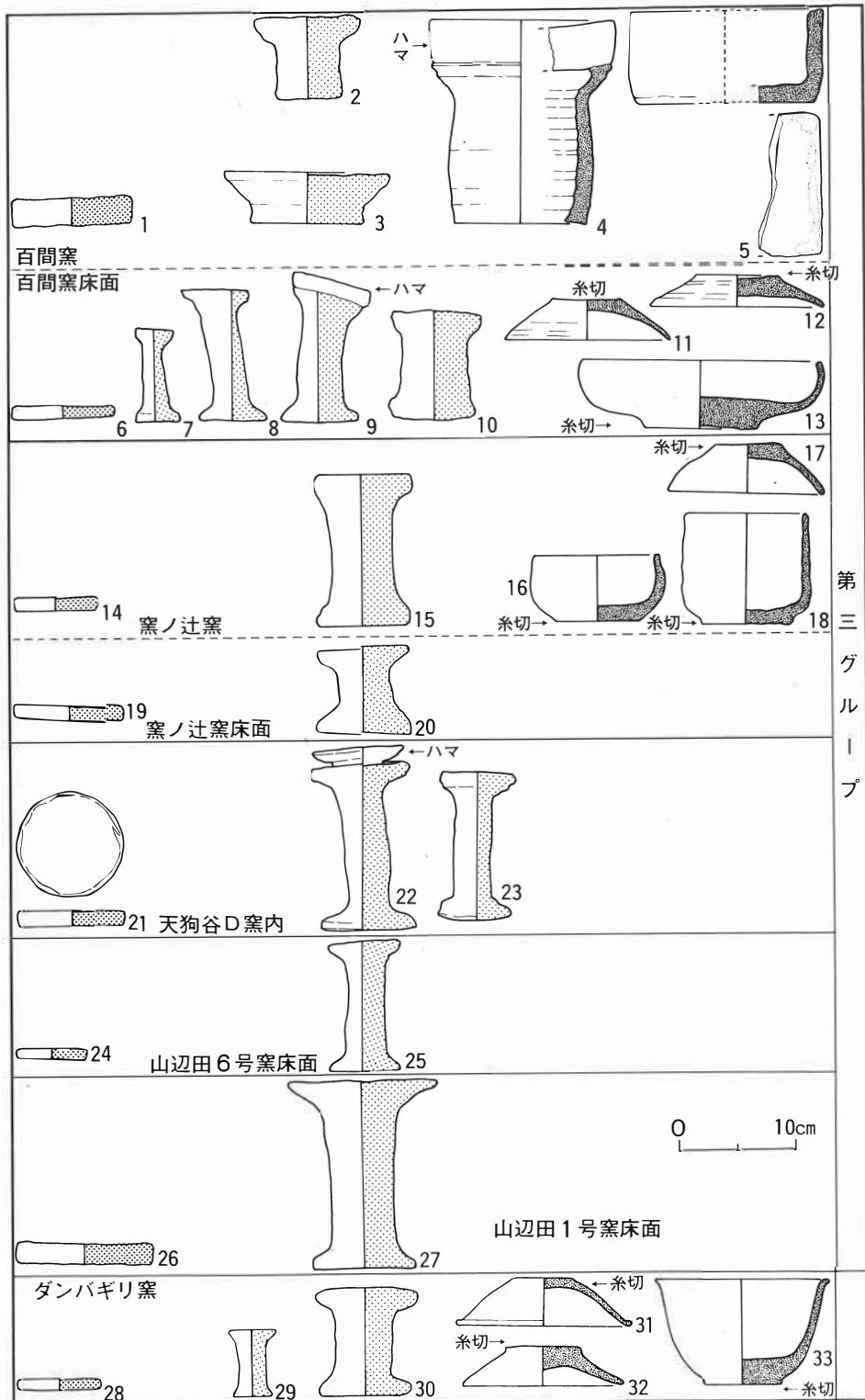
製品は第三グループの末期に現れる染付雲龍見込荒磯文碗が、染付網目文碗と共に碗の中心をなす。伊万里市大川内山の清源下窯や御経石窯では染付網目文碗などの磁器と一緒に京焼風陶器が出土している。京焼風陶器碗には高台無釉で底裏に「清水」などの押印銘のある一群がある。この「清水」印の陶器碗は地蔵平東A窯（佐世保市）においても、染付雲龍見込荒磯文碗と共に出土している。同時代における流行の表れとみてよからう。

このグループの製品のうち比較的高級品は底裏に染付銘をもつものが多々、また銘の種類は豊富になる。そして成形は比較的薄手に

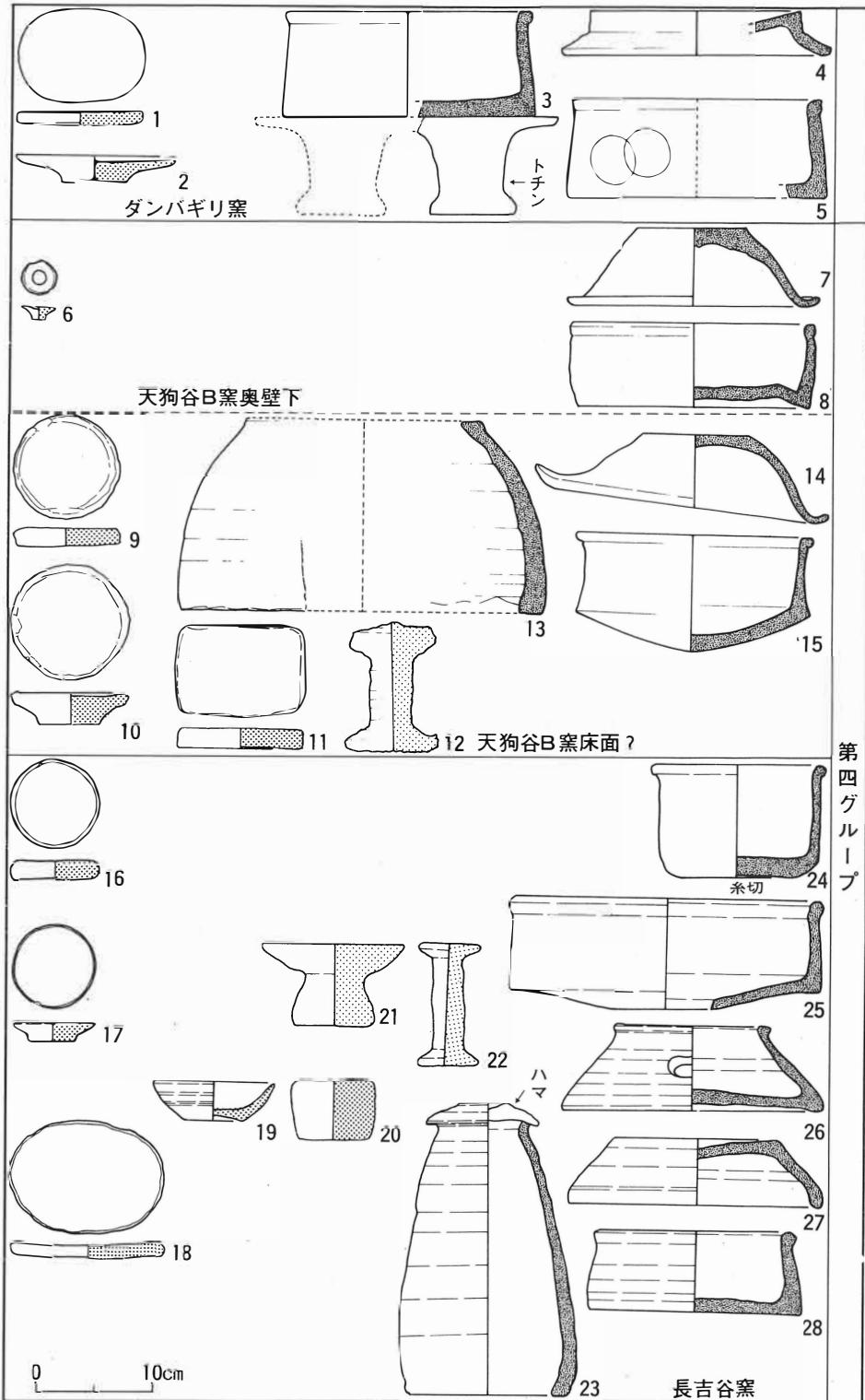
なり、皿の口径に占める高台径の割合は増大する。この高台径の拡大に伴い、底裏を小円錐形のハリと呼ぶ道具（第二〇図24）で支える技法が一般化する。もちろん雑器窯では皿の高台の拡張は遅れるからハリの使用はみられない。またハリ支えの使用は山辺田窯の皿類の中にも認められるから、第三グループの時期に始ったとみられるが、普及するのは第四グループの時期と推測される。

青磁の皿・鉢類の高台内を蛇ノ目状に釉ハギして、そこに窯道具のチャツ（第九図19、第二〇図5、6、14、15）を当てる窯詰めする技法がこのグループで普及する。この技法による青磁は山辺田窯で少量出土しているから、これも第三グループから始ったと推測される。

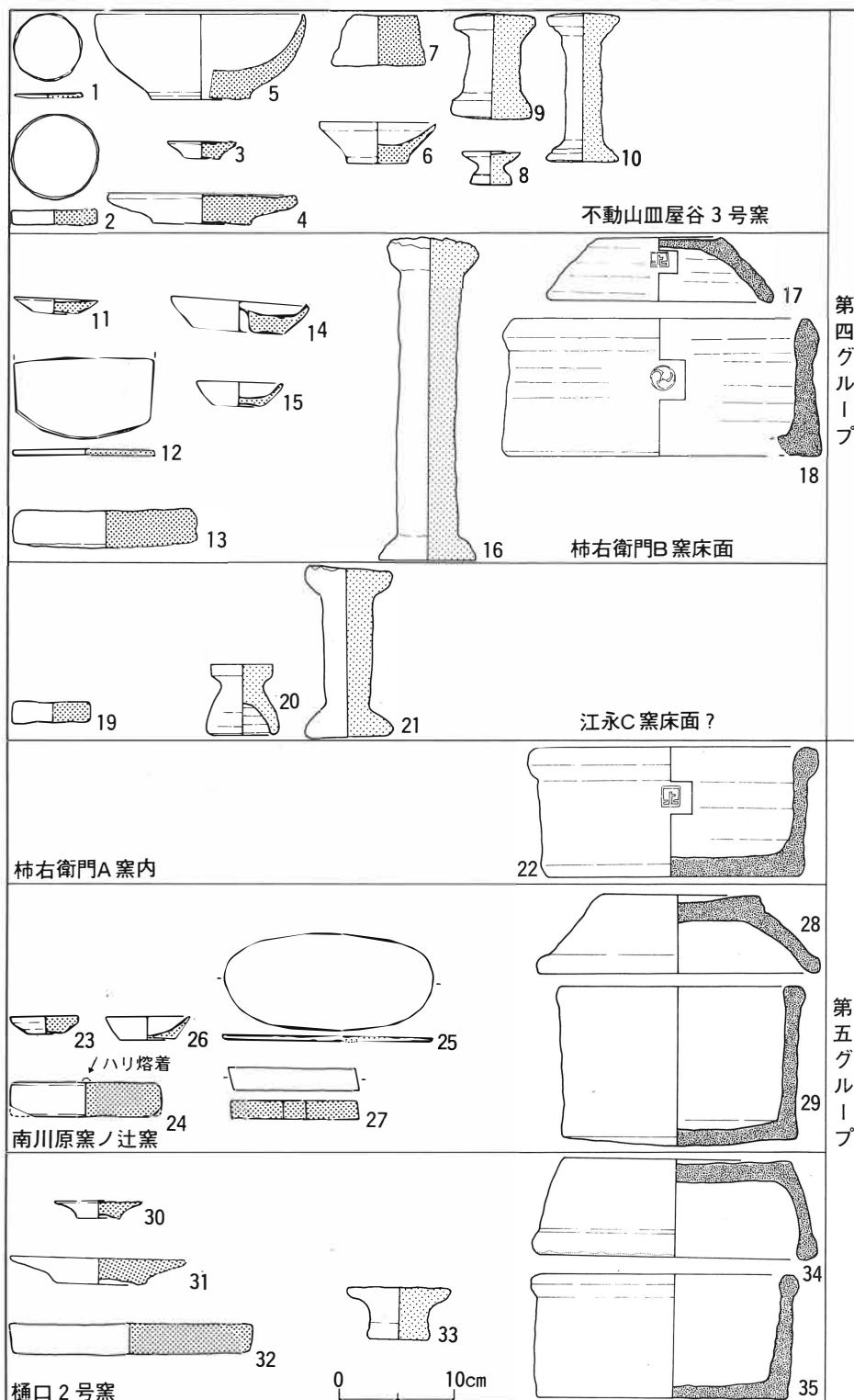
窯道具は第三グループの末期に現れた可能性のある桶胴形サヤ（第九図3、5）、ロクロ成形の逆台形ハマ（第九図10、17など）、チャツ、シノ（第九図21、第二〇図8、20）などが普及する。逆台形ハマやチャツに磁土を用いた磁質のものが現れるのもこのグループの特徴としてあげられる。各窯の窯道具の内容は、製品の内容によつて組合せではサヤの割合が多く、チャツは磁質のものがかなり用いられている。いっぽう、不動山皿屋谷三号窯ではサヤはみられず、青磁皿・鉢が多いのでチャツが目立つが、そのチャツは耐火粘土製で磁質の



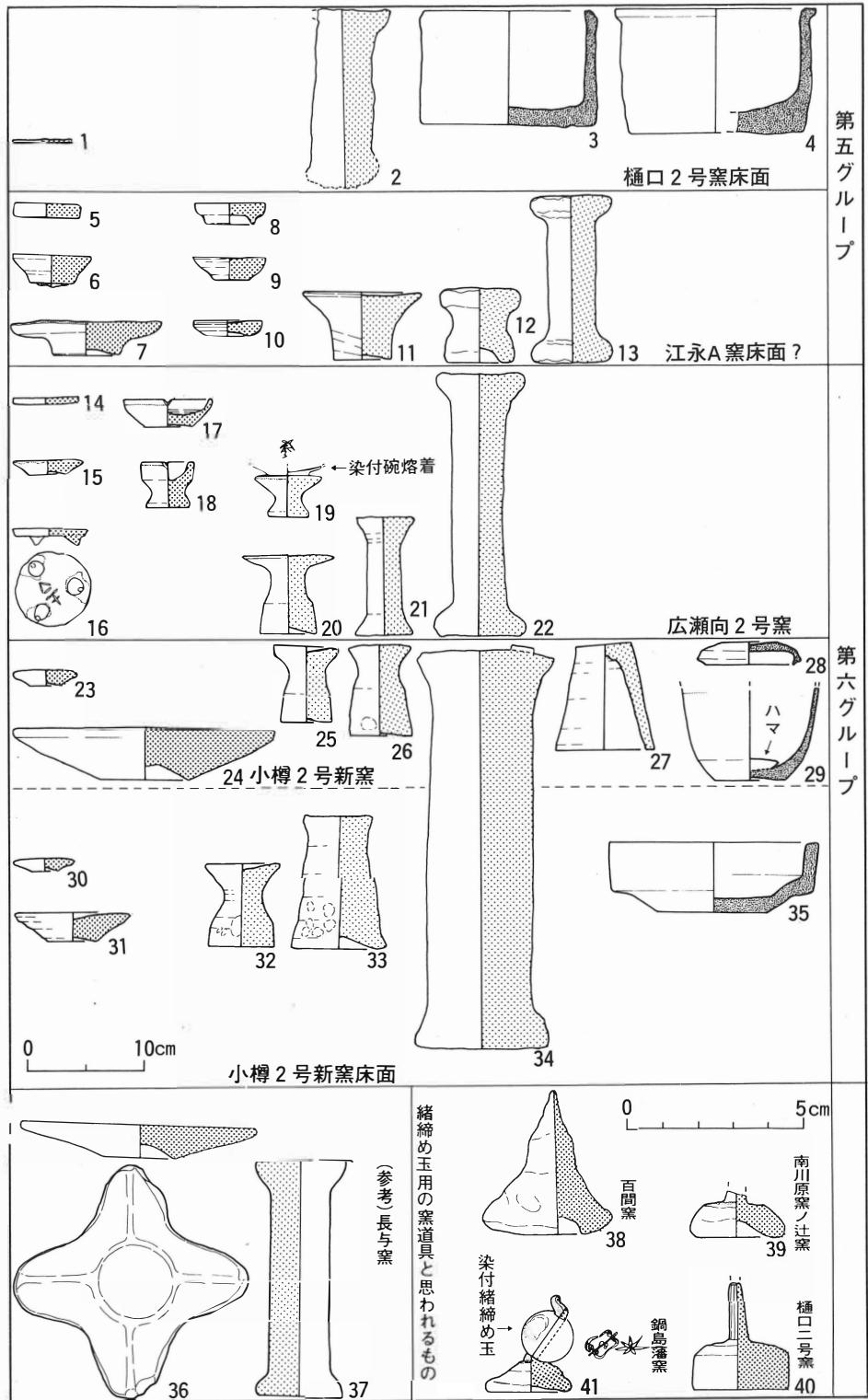
第8図 第3グループの窯跡出土の窯道具



第9図 第4グループの窯跡出土の窯道具



第10図 第4・第5グループの窯跡出土の窯道具



第11図 第5・第6グループの窯跡出土の窯道具他

ものは出土していない。地蔵平東A窯、江永C窯のように比較的雑器の碗類を主として焼いた窯ではサヤ、チャツは出土していないのである。また柿右衛門B窯や、製品からこの時期と推測される長吉

谷窯のように高級品焼造の窯では窯道具の中に特殊なものがみられる。糸切細工による半磁質の薄い板で両面に耐火砂が付着したもの（第二〇図1、12）は、磁質の角材状の道具（第二〇図27）を両端に敷いて棚のよう組んで製品を窯詰めしたのではないかと推測される。

このグループの上限年代は一六六〇年銘のものがある染付荒磯文碗・鉢が主体となることなどから一六五〇年代後半と推測される。下限は見込五弁花文やコニニヤク印判装飾法がみられないこと、五

弁花文は元禄年間には廢窯になつたと推測される柿右衛門A窯において現れ、元禄ごろに始まると思われる南川原窯ノ辻窯^{注13}で盛んに用いられていることなどから、一六八〇年代と推測される。

(本) 第五グループ

焼成室平均幅は五・六・七・三メートル程度であり、柿右衛門A窯（有田町）、江永A窯（佐世保市、第五図）がある。このほかこのグループに属するとみられる窯は樋口二号窯（有田町）があり、登窯中央より少し下方の一室を調査しただけであるが、焼成室幅は約四・八メートルであった。

江永A窯では焼成室砂床が平均二～四度で奥壁に向つて傾斜していることが指摘されているが^{注14}、こうした傾向は第四グループから現れ、第六グループまで続くようである。

このグループになると江永A窯のように奥壁構築材として耐火粘土をレンガ状に固めたトンバイを用い始めたようである。江永A窯では奥壁にのみトンバイを用い、側壁には使用していないらしい。

柿右衛門窯や元禄ごろから一七三〇年代の間とみられる南川原窯ノ辻窯の物原ではトンバイは出土していない。このように現在のところトンバイを使用した窯で一七世紀に遡る例は知らない。

トンバイの使用は拡大化する窯の構築を容易にしたものと想像されるが、このトンバイによる窯壁構築がいつごろ始つたかの記録はないし、また有田周辺の江戸時代の記録にトンバイの語が現れた例もない。トンバイについての記録でもっとも古いのは熊本県天草の高浜上田家文書・明和二年（一七六五）の例であろう。これによると、

当村焼物山仕立候者、去ル宝曆十二（一七六二）午年当所野山之内ニ焼物ニ相成候石御座候ニ付（中略）肥前大村領々焼物師共雇入当村焼物石并燒窯塗土、者田土、とちミ土、とん者り土、水碓掛り等為見候處、焼物仕立二者何角勝手宜敷（後略）
傍点筆者注

とあり、一七六二年には陶石があるので窯場を興そうとし、肥前大

村領（同文書に長与山とある）の焼物師たちを雇入れて、陶石などに窯の塗土、者田土、どちみ土、とんばり土、水碓掛りなどを調べさせたところ、焼物（この場合は磁器）焼造には色々と勝手がよいとの結果が出たとある。こうして高浜焼が始まるのであるが、ここで「とんばり土」の名が初めて見え、同文書には明和二年（一七六五）に支配勘定岸本弥三郎らが視察に来た折に提出した「仕法書」に

石窯塗立候以前、とんばり壺窯ニ凡五百程作置、乾し置、上岸三尺程ニ右とんばりニ而岸を築立、其上ニおんざんの穴明ケ、上窯ニ火通り候様ニ、次第上リニ築立申候

とある。「石窯」は同文書に、雇入れた大村領長与山の陶工が、長与では主に「土焼」を焼いていたので、「南京焼」の上葉の加減や焼き加減などを知らないので、最初の一、二年はたびたび焼損じたことを記しているが、この「南京焼」の説明に「石を製、焼候を南京焼と申候」とある。南京焼は磁器を指すものであるから、石から作ることが磁器の特質とみられていたのである。【石窯】も磁器窯の意とみて間違いないまい。とすれば、磁器窯を築く前に「とんばり」を一窯におよそ五百個程作り、乾かして置き、窯の上岸（奥壁のことか）の（高さ）三尺（約九一センチ）程に、右の「とんばり」で岸を築き立て、その上に「おんざん」の穴（通焰孔）を明け、上

の窯（焼成室）に火が通るようにして、だんだん上るように築き立てるという。

また上田家文書の絵図のうち「焼物窯内之図并二道具共二」（写真一）の中に、「トンバリ」と記し図が描かれている。写真のように直方体のものであることが判り、トンバイと同様のものと認められる。さらに「道具ハ皆、赤土ヲ以テ作ル、然シトチミハ土性トンバリヨリハ、上品ヲ用也」と記されており、耐火性の強い赤土を使つたが、窯道具よりは下等の土であつたことが判る。實際、窯から出土する窯道具とトンバイの胎土を比べると、トンバイの方は小石粒の多い粗い土であることが判る。

以上のように「とんばり」がトンバイのことであることが明らかとなり、トンバイの使用が一七六二年以前に始まるものであることが推測されるのである。

ここで同文書・明和二年（一七六五）に記された築窯技術についてもう少しみてみよう。

焼窯之儀者、口窯、あんこうら、次第上リニ塗立候様、先、地均シ致、窯壺間毎ニ、満々木柱を数百本立、形り能、室之様ニ垂木を結び、小竹ニ而、ゑつ里(か)をりき、其上を、土ニ而厚ク塗立申候、尤、上各毎日槌を以、何遍も擲付、凡三四拾日程之日數ニ、口を明ケ、右、立置候柱・長木・竹等取除、夫各内を、

鍬二而削取、(隨カ)値分擲き、乾き候節、等原火を入申候

つまり、窯は口窯（火口か）、あんこう（安光）からだんだん上るよ

うに塗立てるが、まず、地面をならし、窯室一室ごとに「満々木柱」

を数百本立て、形良く、室のよう^{注16}に「垂木」を結び、「小竹」でえつ

り（棧）をかき、そうして組んだ上を、粘土で厚く塗立てる。そして

上から毎日槌で何回も擲きつけ、およそ三、四〇日程の日数が経

つたあと、口を明け、右の立置いた柱・長木・竹などを取除いて、

それから内部を鍬で削り取り、擲き、乾いたら、もと火を入れるの

である。もちろん前述の上岸などを「とんぼり」で築き立てる工程

が間に組込まれるのである。こうして築いた窯の内部には、

下之方ニ火(あか)を立、上之方ニ者目砂を多ク鋪、其上ニとちみ

を立、又其上ニ者満(はま)を置、或者ちやつ・たたき者満を鋪候而、

焼物壺タ宛載セ、高積・中積・下積三段ニ積候而、燒申候、尤

火(あか)二いたてを立、窯之口塞キ候而、漸七八寸程明ケ候而、

薪を投入燒申候

つまり、焼成室の下の方に火アゼ（火床境）を立て、その上（奥）

方には目砂を多く敷いて（砂床を作り）、その上にトチミを立て、またその上にハマを置き、あるいはチャツ・タタキハマを敷いて、焼

物を一個づつのせる。そうして高積・中積・下積の三段に積んで焼くのである。焼く時には火アゼにタテ（火除け）を立て、焼成室の

口を塞ぎ、漸く七、八寸程（の穴を）明けて、薪を投入するのである。

窯詰めの際、高積・中積・下積とあるのは、同文書絵図（写真一）

の「陶器積之図」のように大・中・小のトチミを用いて積むのが高

積・中積で、砂床に置いたハマの上に積むのが下積に当るのではない

かろうか。江永B窯一室では窯道具と製品が、窯詰めされた状態で

埋没しているのが検出された。これをみると砂床にハマを置き、碗

をのせ、ハマの間にトチンを立て上に火入れを置き、無袖の火入内

底にシノ（ナンキンとも呼ぶ）を据えて上に碗をのせる。高浜文書

の図にはシノがみられないが、三段積であることは前述の記録と類似している。こうした窯詰めについては、有田の『皿山代官旧記覚

書』（以下『旧記』と略す）天明六年（一七八六）に、藩からの借金

書^{注17}として、返済方法として、

只今迄ハ下積間釜之儀ハ返上差除被置候得共、近き比ハ下積間

釜勝ニ而御取納、後レニ相成候条

とあり、今まで下積（中積・高積はしないの意か）・間釜の場合

には返済から除かれたけれども、近ごろは下積・間釜勝ちになつて

借金返済が遅れるようになつたとある。よつて以後は次のように返

上するようにして、

一、中釜迄下火口迄下積仕候節ハ、返上ニ不及、大釜ニ相懸候節

ハ、返上仕候事、

一、間釜并中天積之儀返上仕候事、

つまり、中釜より下方、火口まで下積の場合は返上しなくてよい。しかしそれが大釜に懸つた場合にはその分は返上すること。間釜ならびに中天積注19の場合は返上することある。このように窯詰めは下積、中天積もしくは中積・高積のように二～三段に積むのが一般的だつたが、不景気などの折には下積一段だけの場合もあつたことが知られる。上田家文書・明和二年（一七六五）には

焼方の儀、口窯あんこう分焼付、段々次第上りニ相成、窯も焼揚り申候、尤あんこう分式窯目迄ハ焼物少シも入不申、ぬくめを入候計ニ一夜余も焼申候、三番目窯迄ハ焼物少々宛入申候出来方も不宜、六七番目之窯より段々余計ニ焼物入、拾番目分者何拾番も窯之内法同様塗立申候

とあり、焼方について詳述している。つまり口窯・安光より焼付け、だんだん上方に上つてゆき焼揚る。もつとも安光より二番目の焼成室までは焼物を窯詰めしない。三番目から五番目までの焼成室には焼物を少し窯詰めするが出来方は良くない。六、七番目の焼成室からはだんだん余計に窯詰めし、十番目よりは何十番も焼成室の内法を同様に塗り築くといふ。上田家文書絵図（写真一）の窯の図の説明文には「此上何間モ下ニ同シ、五十間モ有ル間数多ク有程、宜キ

陶器出来スルナリ」とあって、焼成室数が多いほど、良く焼上るという。

史料上にみる窯室の呼称は必ずしも一定していない。上田家文書の場合、燃焼室（胴木間）を「口窯」ないし「火口窯」と呼んでいるようであり、「安光」は焼成室第一室を指しているらしい。『旧記』天明七年（一七八七）に広瀬本登について、小釜、中釜十五軒を塗立て、そのうち火口灰釜・心見釜三軒は課税されないと記されている。これは前述の上田家文書の安光より二番目の室までは焼物を窯詰めせず、三番から五番目の室は少し窯詰めするが出来方は良くなないと記している室あたりに該当すると思われる。降って天保年間（一八三〇～四三）の波佐見皿山の状況を記した『郷村記』中に、各皿山の「釜数」を掲げているが、例えば稗木場皿山では

釜数 二〇軒

内本釜一四軒、安光三軒、灰安光三軒

とあり、一つの窯に安光・灰安光を合せて六軒（室）あることが判る。他に六窯あるが、安光・灰安光の合計数は六九室である。そして「釜運上銀」を記すが、「但本登一軒につき十五匁」とあり、安光・灰安光には「釜運上銀」が課税されないことが知られる。しかし「焼物出来高六、六三〇俵、但釜一軒につき三九〇俵、一ヶ年に六度焼立（平均）、尤も灰安光は軒數除外」とあり、焼成室一室が一

年間に六度焼いての平均出来高は一室につき三九〇俵といい、これには灰安光は含めないとある。続いて「焼物土八、七七二荷、但釜一軒に付安光も入れて一度に八六荷、尤も一ヶ年六度の平均、灰安光はこれを除く」とし、焼物を作る陶土は安光も含めて焼成室一室につき、一度の焼成に八六荷を使う。もつとも一年間六度焼成の平均値であり、灰安光は除外すると記している。上田家文書にある安光より二番目の室までは焼物を窯詰めしないとあるのが、天保の波佐見例の陶土も不用という灰安光に当ると推測され、三番から五番の少し窯詰めするが出来は良くなないという室が波佐見例の安光に相当すると思われるのである。以上のことをまとめてみると、

桐木間か

口窯	安光、二番
火口	三番
灰釜	五番
心見釜（計三軒）	
安光三軒	
製品を焼く	

釜運上銀なし

『波佐見史上巻』四二六頁の注に「灰安光は焚起し窯か」とし、四三七頁の窯の概念図には「焚き起し（灰あんこう）」と記しているが、焚起し（燃焼室）が三室もあるのが疑問として残り、灰安光は、焚起し（燃焼室）とは言い切れないよう思う。

また、波佐見稗木場皿山では、年六度焼くとあったが、三股皿山の記録では年三度である。

上田家文書・明和二年（一七六五）には

燒窯之儀何分手入塗立候而も、加減次第二而、一焼二焼ニ塗直シ候様損シ申候、又者加減宜敷候得者、五年七年程も相用申候、本窯、素焼窯共ニ素屋を拵、萱葺仕置申候

つまり、窯はいくら手入れし壁を塗つても、加減次第で一、二回焼いただけで破損する場合があるし、逆に加減が良ければ五、七年程も保持することがあるというのである。

前述の『旧記』天明六年（一七八六）や天明七年（一七八七）に小釜・中釜・大釜の区別がみられたが、『旧記』明和元年（一七六四）には「壹登之内小釜何間、中釜何間、大釜何間と書載可差出候事」とあり、同明和三年（一七六六）に

有田郷泉山本登り釜之内、十番迄之処至而小釜ニ而、焼物不出來有之候ニ付、下々十番釜迄之処少々宛太メ塗直度、

つまり有田郷泉山本登の内、十番までの焼成室はいたつて小釜にて、焼物が良く出来ないので下より十番釜までを少々づつ大きく塗直したいという。さらに年代は降るが、柿右衛門文書・文政一二年（一八二九）下南川原登の史料^{注21}は、小釜・中釜・大釜の位置関係を詳しく述べてくれる。これを表にまとめてみると次のとおりである。

番	種類	釜燒名	運上銀額
一	小釜	兵太夫	三匁三分
二	兵太夫	兵太夫	四匁三分
三	徳兵衛	徳兵衛	五匁四分
四	清市	清市	六匁六分
五	柿右衛門	柿右衛門	七匁七分
六	中釜	次吉	十匁三分
七	ク	竹吉	十五匁
八	大釜	伊右衛門	十八匁六分
九	竹吉	竹吉	十九匁六分
十	伊右衛門	兵太夫	二十匁六分
一	徳兵衛	徳兵衛	二十二匁
二	兵太夫	柿右衛門	二十匁六分
三	徳兵衛	徳兵衛	二十七匁

表2 文政12年(1829)下南川原登各焼成室の釜焼と運上銀額
(柿右衛門文書より)

このように、兵太夫(四室)、徳兵衛(二室)、清市(二室)、柿右衛門(二室)、次吉(一室)、竹吉(一室)、伊右衛門(一室)の七名の窯焼が下南川原登一窯を共同で経営していたことが判る。そして下から五室が小釜、第六～八室が中釜、第九～一四室が大釜と区分されている。運上銀額をみると、第一室では三匁三分であるが、漸増して第八室、第一三室を除けば上方へと順次増加している。運上銀額は同じ窯では原則として窯詰でくる製品量に応じて課されるのであるから、焼成室の規模を表しているものとみてよかろう。中釜第六室は小釜第一室の約三・一倍、大釜第九室は小釜第一室の約五・六倍である。明和二年(一七六五)上田家文書にある六、七番目の焼成室からは

このように、兵太夫(四室)、徳兵衛(二室)、清市(二室)、柿右衛門(二室)、次吉(一室)、竹吉(一室)、伊右衛門(一室)の七名の窯焼が下南川原登一窓を共同で経営していたことが判る。そして下から五室が小釜、第六～八室が中釜、第九～一四室が大釜と区分されている。運上銀額をみると、第一室では三匁三分であるが、漸増して第八室、第一三室を除けば上方へと順次増加している。運上銀額は同じ窯では原則として窯詰でくる製品量に応じて課されるのであるから、焼成室の規模を表しているものとみてよかろう。中釜第六室は小釜第一室の約三・一倍、大釜第九室は小釜第一室の約五・六倍である。明和二年(一七六五)上田家文書にある六、七番目の焼成室からは

だんだん余計に窯詰めするとあるのは、下南川原登をみると中釜からに当り、生産効率が良いものは中釜以上と推測される。

このように焼成室の規模が上方にゆくにつれてだんだん大きく(とくに一〇室位まで)作ることが史料上からも判るが、発掘された窯を見ると、その規模の拡大は主に焼成室幅の方に關つてくることが知られるのである。

以上のようにみてくると、第五室目の焼成室幅が五・六四メートルの松浦皿山窯(松浦市、第五図)は第四グルーに属する第五

グルーに属する窯と推測される。

製品は皿や碗の見込中央に五弁花文を染付したものが現れ盛行する。皿の外側面の唐草文の花の部分がハート形に描かれたものが現れるのもこのグルーであり、高台内中央の染付銘としては「福」字を崩した福(いわゆる渦福)や「大明年製」銘がもつとも多用される。また高台を蛇ノ目凹形高台を作るものもこのグルーから一般的となる。装飾法としてはコンニヤク印判や型紙摺が行われるものもあるにこのグルーの時期である。江永A窯は白化粧土による刷毛目陶器碗と半磁器唐草文碗が主製品である。

主要な窯道具は第四グルーの窯道具が引き続き用いられている。柿右衛門A窯や南川原窯ノ辻窯ではサヤ(第二図22、28、29)の出土量が多いが、江永A窯ではトチン(第二図13)、シノ(第二図12)、

逆台形ハマ（第二図6、7、9）が主でサヤはみられず、物原トレンチでサヤの蓋が一点出土しているに過ぎない。製品の精粗の違いが窯道具の組合せの差違として現れたものとみられる。特殊な道具としては、南川原窯ノ辻窯や樋口二号窯出土の緒締め玉用と思われるもの（第二図39、40）がある。第二図38は第三グループの百間窯出土品であり、41は鍋島藩窯（伊万里市）出土の染付緒締め玉が熔着した状態で出土したものである。

第五グループの上限年代は柿右衛門A窯出土品と南川原窯ノ辻窯開窯期と推測される物原出土品などから元禄ごろとみられる。このグループの下限年代については明らかでない。しかし江永A窯の下限は一八世紀中葉ごろと推測される。

(iv) 第六グループ

焼成室平均幅は七・一~八・五メートル程度であり、谷窯、小樽二号新窯（以上有田町、竹第廿四がある。また広瀬向二号窯（西有田町）は窯体を発掘していないが、地表に露出した窯体部は幅約七・三メートル、奥行約四・六メートルであるからこれもこのグループとみてよい。三窯はいずれも『安政六年松浦郡有田郷図』（佐賀県立図書館蔵）に窯体が描かれている。それによると、谷窯は二五室、小樽二号新窯は一七室、広瀬向二号窯は一六室の登窯である。

このグループの窯は奥壁ばかりか側壁にもトンバイを用い、平面プランは第五グループと比べるとさらに横長形となる。また温座の窯体は操業期間に何度も塗直したであろうことは前述のとおりであるが、小樽二号新窯の場合、窯体の初築年代の上限は記録にみると新しく窯を築くことを藩に願い出て許可され、火入れは文化八年と判る（注22『旧記』）。広瀬向二号窯（往時は広瀬本登と呼ばれた）の場合、天明七年（一七八七）に窯が大破したので築き直しを願い出たが、資金難のために三三室あつた窯を一五室に縮少して築いたとある（注23『旧記』）よつて窯体の上限は一七八七年と思われる。

第六グループの窯は発掘例が少ないと、第五グループとの接点が明らかでないので、第六グループの上限を示す製品を提示することは現時点では難しい。確實に第六グループの製品とみられるのは小樽二号新窯と広瀬向二号窯に共通の製品である。それは蓋付の染付広東形碗、染付端反碗や蓋なしの染付小丸碗などである。これらが第六グループにおける文化以降の碗の主製品とみられる。底裏銘としては清朝年号の「乾隆」の「乾」字の篆書体を染付したものが多い。

窯道具は第五グループの逆台形ハマ、トチン、シノ、チャツに加

えて足付ハマ（第二図16）やタコハマ（第二図36）が現れ、特殊なものとしては小樽二号新窯出土の極真焼用とみられる「外匣」がある（第二図28、29）。これはサヤの一種であるが、焼成時に釉薬によって蓋と身を熔着させ、製品を取出す時には打壊するのである。

窯道具の所有者印は呉須書によるものが多くなるのもこのグループの特徴である。

前述の上田家文書には「宝暦十二年開起、但当巳年迄年数九十ヶ年ニ相成ル、高浜村陶山竈之図」と記された窯の絵図がある（写真二）。宝暦一二年より約九〇年後の巳年といえば一八五七年である。窯の図は一から一二までの番号が付された室が描かれ、図からも上へ登るにつれてだんだん規模が大きくなることが判るが、第二室から一二二室までは室の寸法が記入されている。これをまとめてみると表三のようになる。比較のために第五室より一二二室までの規模を平均してみると幅は約七・四メートル、奥行は約三・六メートルであり、第六グループの焼成室平均幅の範囲内に入る。

このグルーブの上限は、現在のところ第五グルーブの江永A窯の下限推定年代が一八世紀中葉であることなどから一八世紀後半と推測される。下限は明治であるが、一部の窯は大正ごろまで使用されたという。

表3 上田家文書『高浜村陶山竈之図』の焼成室規模

まとめ

以上のように焼成室平均幅によつて区分した第一～六グループは製品・窯道具なども考え合せてみると、それが時代とともに拡大する窯の変遷を表していることが明らかになつた。

第二グループの窯は、唐津系陶器と磁器を併焼していた時期に当り、第三グループは鍋島藩による皿山の整理・統合が行われ、磁器を中心の生産体制が確立された時期の窯とみられる。そして中国の明末清初の動乱によつて一六五九年にオランダ商社による海外輸出が始まると、第四グループの窯では製品ばかりか焼成技術にも大きな変化が認められる。第五グループはその後の築窯法に大きな影響を及ぼしたと推測されるトンバイの使用が始まる。第六グループの窯は窯体の肥大化が頂点に達した時期に当り、また巨大な共同窯の終末期といえよう。

このように肥前の登窯がたどつた変遷を概観してみたが、なお長大な窯全体を発掘した事例が少ないため、焼成室規模の平均値とはいってもかなり大雑把な部分がある。また焼成技術の重要な要素である窯道具の変遷について詳述できなかつたが、これについては稿を改めて述べたい。

● 本稿で用いた窯や窯道具の図は各報告書などからトレースしたが、論旨を強調するために省略した部分がある。

- | | | |
|----|--|-------------|
| 1 | 秀島貞康『土師野尾古窯跡群』諫早市教育委員会、一九八五。 | 注1の四八頁～四九頁。 |
| 2 | 大橋康二「十七世紀における伊万里の窯跡とその製品」『十七世紀の景德鎮と伊万里』佐賀県立九州陶磁文化館、一九八二の九七頁ほか。 | 注1の四八頁～四九頁。 |
| 3 | 倉田芳郎編『長崎・松浦皿山窯址』松浦市教育委員会、駒沢大学考古学研究室、一九八二。 | 注1の四八頁～四九頁。 |
| 4 | 副島邦弘「近世古窯の窯本体の構造について」『古高取永満寺宅間窯跡』直方市教育委員会、一九八三。 | 注1の四八頁～四九頁。 |
| 5 | 大橋康二「肥前陶磁の変遷と出土分布」『国内出土の肥前陶磁』佐賀県立九州陶磁文化館、一九八四。 | 注1の四八頁～四九頁。 |
| 6 | 葉宏明、曹鶴鳴、程朱海「關於我国陶器向青瓷發展的工芸探討」『中国古陶瓷論文集』一九八二の一五一頁。 | 注1の四八頁～四九頁。 |
| 7 | 盛峰雄『阿房谷下窯跡』伊万里市教育委員会、一九八五。 | 注1の四八頁～四九頁。 |
| 8 | 大橋康二『百間窯・樋口窯』佐賀県立九州陶磁文化館、一九八五。 | 注1の四八頁～四九頁。 |
| 9 | 大橋康二「伊万里染付見込荒磯文碗・鉢に関する若干の考察」白水九号、注6の一五三頁。 | 注1の四八頁～四九頁。 |
| 10 | 大橋康二『南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯』佐賀県立九州陶磁文化館、一九八六。 | 注1の四八頁～四九頁。 |
| 11 | 久村貞男『江永古窯』佐世保市教育委員会、一九七五。 | 注1の四八頁～四九頁。 |
| 12 | 大橋康二『南川原窯ノ辻窯・広瀬向窯』佐賀県立九州陶磁文化館、一九八六。 | 注1の四八頁～四九頁。 |
| 13 | 大橋康二『百間窯・樋口窯』佐賀県立九州陶磁文化館、一九八五。 | 注1の四八頁～四九頁。 |
| 14 | 大橋康二『伊万里染付見込荒磯文碗・鉢に関する若干の考察』白水九号、注6の一五三頁。 | 注1の四八頁～四九頁。 |

熊本県教育委員会『生産遺跡基本調査報告書Ⅱ』一九八〇の一頁～三二二頁。

「真木柱」のことか。真木柱は「杉や桧などの材で作つた柱」(『日本国語大辞典』小學館)。

「えつり（棧）」とは「割り木、竹などを縄で結び、並べて、屋根や壁の下地としたもの」(『日本国語大辞典』小學館)。

窯詰めが一杯にできず、平面的に空隙があるという意であろうか。

欽古堂亀祐『陶器指南』文政一三年（一八三〇）には窯中央の最上段に窯詰めしたものを「中天」と記す。

波佐見史編纂委員会『波佐見史（上巻）』一九七六の四二三頁～四二六頁。

有田町史編纂委員会『有田町史（陶業編Ⅰ）』の五四六頁～五四八頁。

大橋康二『小樽二号窯跡』有田町教育委員会、一九八六。

注12の三頁。

上田家文書『陶山再興歎願書諸入用凡積并繪図扣』に安政四年（一八五七）、勘定奉行が天草郡を廻村した際に焼物山を再興するよういわれ、高浜焼の実態について述べた別紙を差上げたことが記されている。窯の繪図はこの折のものの可能性が強い。

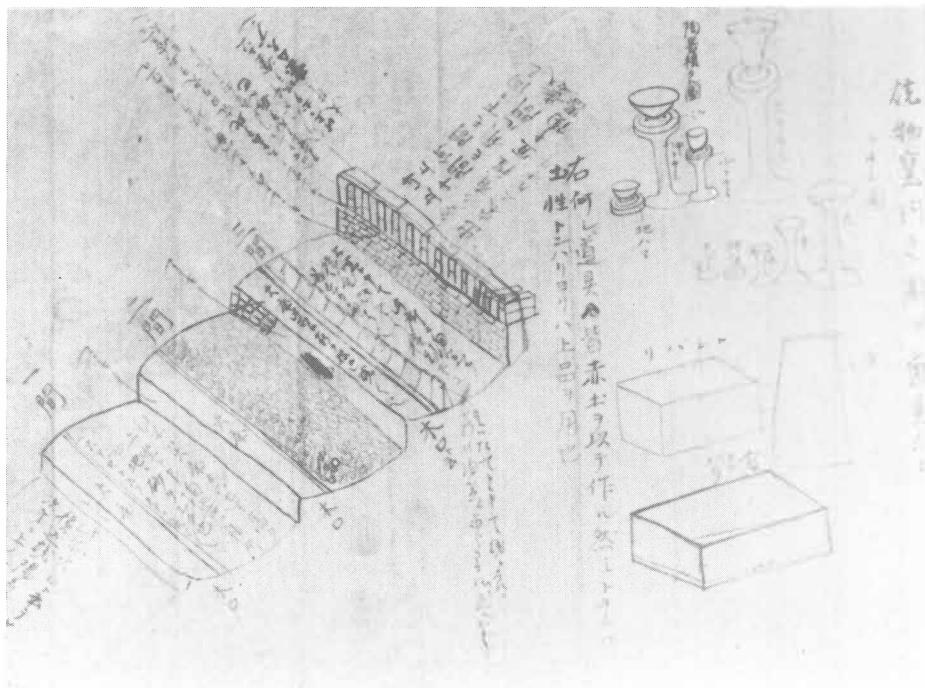


写真1 高浜焼窯内の図（上田家文書絵図、『生産遺跡基本調査報告書Ⅱ』より）

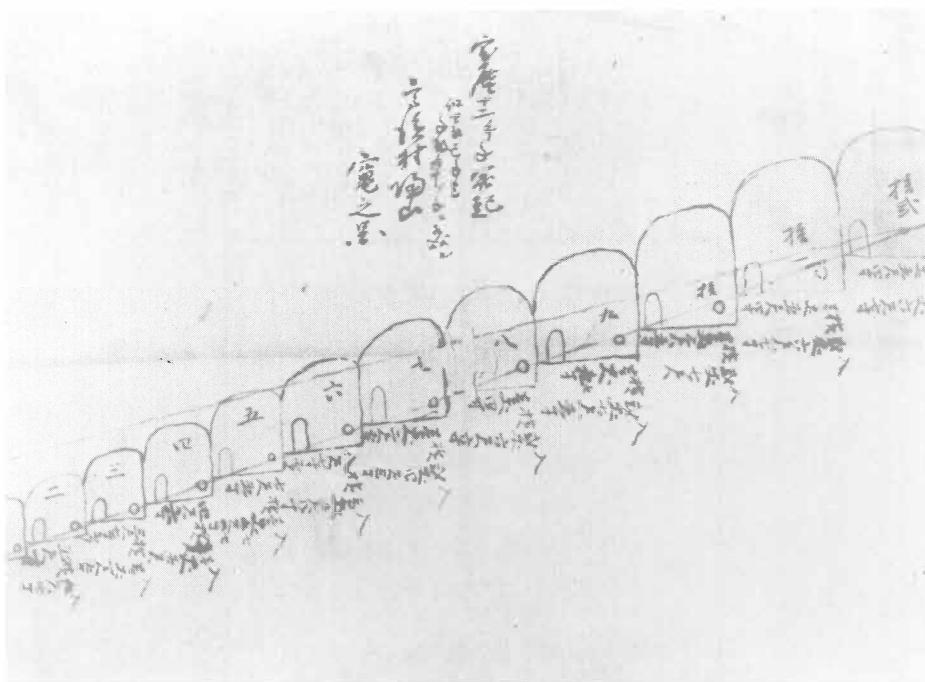


写真2 高浜焼窯の図（上田家文書絵図、『生産遺跡基本調査報告書Ⅱ』より）